巴里の旅窓より

與謝野晶子

青空文庫

汽車で露西亞や獨逸を過ぎて巴里へ來ると、先づ目に着くのは佛蘭西の男も女もきやしやな體をして其姿の意氣な事である。勿論一人一人を仔細に觀るなら各　の身分や趣味が異ふ儘に優劣はあらうが、概して瀟洒と都雅であることは他國人の及ぶ所で無からう。佛蘭西の女と云へば、其れが餘りに容易く目に附くので、どの珈琲店にも、どの酒場にも、どの路上にも徘徊する多數の遊女が代表して居る樣に一寸思はれるけれど、自分は矢張りコメデイ・フランセエズの樣な一流の劇場の客間に夜會服の裾を引いて歩く貴婦人を標準として、其れに中流の生活をして居る素人の婦人の大多數を合せて佛蘭西の女の趣味を考へたい。目の周圍にいろんな隈をとつたりする遊女の厚化粧は決して此國の誇る趣味ではない。自分は劇場や畫の展覽會の中、森を散歩する自動車や馬車の上に、睡蓮の精とも云ひたい樣な、細りとした肉附の豐かな、肌に光があつて、物ごしの生生とした、氣韻の高い美人を澤山見る度に、ほれぼれと我を忘れて見送つて居る。而うして、其等の貴婦人の趣味が中流婦人乃至それ以下の一般の婦人の間にまで影響して居ると見えて、隨分粗末な材料の服裝をして居ながら其姿に貴婦人の俤のある女が澤山に見受けられる。自分は是等の趣味の根柢になつて居る物が何であるかを早く知りたい。

今姑く自分の歐洲に於ける淺はかな智識で推し量ると、佛蘭西の女の姿の意氣で美しいのは、希臘や伊太利から普及した美術の品のよい瀟洒な所が久しい間に外から影響したのでは無いか。ルウヴルの博物館にある伊太利の繪と彫刻とを見た丈でも自分は然う云ふ事が想像される。其等古代の美術にある表情と線とが現に巴里の芝居の俳優の形に著しく出て來る樣に、同じく自分は其れを佛蘭西の女の日常の形に見出す氣がして成らない。其れが全部で無くても、大部分は古代藝術の自然の影響と、又意識して採擇した結果とであらうと想はれる。殊に女優の形と云ふものは希臘や伊太利の古美術に現はれた人體の美しい形を細密に亙つて研究して居るらしいから、其女優の形が上中流の婦人社會に影響するのは當然であらう。

自分が佛蘭西の婦人の姿に感服する一つは、流行を追ひながら而も流行の中から自分の趣味を標準にして、自分の容色に調和した色彩や形を選んで用ひ、一概に盲從して居ない事である。自分は三四着の洋服を作らす參考にと思つて目に觸れる女の服裝に注意して見たが、色の配合から釦の附け方まで同じだと云ふ物を一度も見たことが無い。仕立屋へ行けば流行の形の見本を幾つも見せる。誂へる女は決して其見本に盲從する事なく、其れを參考として更に自分の創意に成る或物を加へて自分に適した服を作らせるのである。

又感服した一つは、身に過ぎた華奢を欲しない儉素な性質の佛蘭西婦人は、概して費用の掛らぬ材料を用ひて、見た目に美しい結果を收めようとする用意が著しい。此點は京都の女と似通つた所がある。富んだ女が絹を用ひる所を麻で濟ませ、麻も日本などに比べて非常に高價であるから、麻の所を更に木綿で濟ませて居ると云ふのが普通である。模造品の製造が巧であるから木綿でも麻や絹に見える上に、着る人の配色が調和を得て居るので、絹を着たのと同じ美しさを示して居る場合が多い。

歐洲の女は何うしても活動的であり、東洋の女は靜止的である。

静止的の美も結構であるけれど、何うも現代の時勢には適しない美である。自分は日本の女の多くを急いで活動的にしたい。而うして、其れは決して不可能で無い許りか、自分は歐洲へ來て見て、初めて日本の女の美が世界に出して優勝の位地を占め得ることの有望な事を知った。唯其れには内心の自動を要することは勿論、從來の様な優柔不斷な心掛では駄目であるが、其れは教育が普及して行く結果現に穩當な覺醒が初まつて居るから憂ふべき事ではない。但し女の容貌は一代や二代で改まる物で無いと云ふ人があるかも知れないが、自分は日本の女の容貌を悉く西洋婦人の様にしようとは願はない。今の儘の顔立でよいから、表情と肉附の生生とした活動の美を備へた女が殖えて欲しい。髪も黒く目も黒い日本式の女は巴里にも澤山にある。外觀に於て巴里の女と似通つた所のある日本の女が何が巴里の女に及び難いかと云へば、内心が依頼主義であつて、自ら進んで生活し、其生活を富まし且つ樂まうとする心掛を缺いて居る所から、作り花の様に生氣を失つて居る事と、もう一つは、美に對する趣味の低いために化粧の下手なのとに原因して居るのでは無いか。日本の男の姿は佛蘭西の男に比べて隨分粗末であるが、まだ其れは可いとして、日本の女の裝飾はもつと思ひ切つて品好く派手にする必要があると感じた。

松岡氏と良人と自分がアンワリイドの停車場からロダン先生を訪ふ爲にムウドン行の汽車に乘つたのは、初めて詩人レニエ先生を訪うた日の午後であつた。此汽車は甲武線の電車の様に、街の中を行きながら家竝よりは一段低く道を造つた所を走るのである。短距離にある市内の停車場（ステエション）を七つばかり過ぎて郊外へ出ると、涼しい風が俄に窓から吹き込んで來るのであつた。暗がりから明るみへ出た様な氣味で自分は右と左を見廻して居た。近い所も遠い所も家は低くてそして代赭色（たいしやいろ）の瓦で皆葺（ふ）いてある。態とらしく思はれる程その小家の散在した間間に木の群立がある。雞冠粟（コクリコ）の花が少しあくどく感じる程一面に地の上に咲いて居る。矢車の花は此國では野生の物であるから日本で見るよりも背が低く、菫かと思はれる程地を這つて咲いて居る。自分が下車すると、例の様に、

「ジヤポネエズジヤポネエズ」

と云つて、一汽車の客が皆左の窓際へ集つて眺めるのであつた。自分は秋草を染めたお納戸の絽の着物に、同じ模様の薄青磁色の絽の帶を結んで居た。停車場の驛夫にロダン先生の家へ行く道を聞くと、彼處をずつと行けば好いと云つて岡の下の一筋道を教へて呉れた。馬車などは一臺もない停車場である。眞直に突當つてと云はれた道が何處迄も果ての無い様に續いて居る様なので、自分は男達に後れない様にして歩きながら時時立留つて汗を拭いては吐息さへもつかれるのであつた。松岡氏と良人とは逢ふ人毎に目的の家を尋ねて居る。逢ふ人毎と云つても一町に一人、三町に二人位のものであることは云ふ迄もない。粉挽小屋の職人までが世界の偉人を知つて居て、

「ムシユウ・メモトル・ロダン」

と問ひ返して、其返事を與へる事に幸福と誇りとを感じて居るらしいのを見ると、自分は涙ぐましいやうな氣分にもなるのであつた。

眞赤な土がほろほろと……

だらだら坂の二側（ふたかは）に

アカシヤの樹のつづく路。

あれ、あの森の右の方、
飴色をした屋根と屋根、
あの間から 群青(ぐんじやう)を
ちらと抹(なす)つたセエヌ川。

涼しい風が吹いて來る、
マロニエの香と水の香と。

之が日本の畑なら
青い「ぎいす」が鳴くであろ。
黄ばんだ麥と雛罌粟(コクリコ)と、
黄金にまぜたる朱の赤さ。

誰(た)が挽き捨てた荷車か、
眠い目をして路ばたに
じつと立つたる驢馬(ろば)の影。

「ロダン先生の別莊は。」
問ふ二人より側に立つ
キモノ姿のわたしをば
不思議と見入る野良男(のらをとこ)。

「ロダン先生の別莊は
ただ眞直に行きなさい。
木の間からその庭の
風見車(かざみぐるま)が見えませう。」

巴里から來た三人の
胸は俄にときめいた。
アカシヤの樹のつづく路。

やつと其道の盡きる處まで來た。其處は自分達の今乘つて來たのとは異ふ別の汽車道の踏切である。そして一層人氣のない寂しい道へ自分達は出た。二町程來た時前を行く人を呼んで松岡氏が尋ねると、ロダン先生の邸は直ぐ此處の左で、其處に門がある、そしてずつと奥に家があると云ふのであつた。見ると牧場の柵の樣な低い木の門が其處にある。マロニエの木が隙間もなく青青と兩側に立つて居た。然し人の通ふ道の上には草が多く生えて居る。右の掛(かか)りに鼠色のペンキで塗つた五坪位の平屋(ひらや)がある。硝子窓が廣く開けられて入口に石膏の白い粉が散ばつて居るので、一見製作室(アトリエ)である事を自分達は知つた。けれど之は弟子達のそれであらう、床も天井も低い、テレビン油で汚れた黒い切の澤山落ちて居るこの狹い室が世界の帝王さへも神の樣に思つて居るロダン先生の製作室だとは入つて暫くの間自分には思はれなかつた。白い仕事着を着た頤鬚(あごひげ)のある、年若な、面長な顔の弟子らしい人と男達の話して居る間に、自分は眞中に置かれた出來上らない大きい女の石膏像を見て居た。矢張りロダン先生が此處で仕事をされるのであると思つた時自分の胸は轟(とゞろ)いた。半から腕の切り放されてある裸の女は云ひ樣もない清い面貌(おもわ)をして

今や白熱の様な生命を與へられようとして居る。先生は巴里の家の方においでになつて夕方でないと歸られない、殊に今日は他家へ廻られる筈であるから、それを待つより巴里へ行かれる方が好いであらうと弟子は云ふのであつた。自分は良人と相談をして夫人への土産だけを出し、その弟子に托して名殘惜しい製作室を出て引き返さうとした。

「一寸お待ち下さい」

と云ひながらその人は又自分達を中門の中まで案内して置いて母家の窓の下へ寄つて夫人に聲を掛けた。自分はこんな事をも面白くもゆかしくも思つた。大藝術家の夫人が窓越しに弟子の話すのを許すと云ふさばけた所作をさう思ふのであつた。此處からはずつと向うが見渡される。起伏した丘にあるムウドンの家竝や形の好い陸橋なども見える。此村は美觀村と云ふのださうである。

「奥さんがお目に掛りますからお待ち下さい」

と弟子は云つて、又自分達をもとの製作室に伴つた。そして前よりは一層打解けた調子で男達と弟子は話すのであつた。自分はまた男達と一緒に先生の未成品を眺めて居る事が出來るのであつた。まだ外に男の半身像や様様の石膏像が十ばかりも彼方此方に置かれてあつた。歸り途を聞くと、

「船にお乘りになるのが好いでせう。奥さんがお許し下すつたら私がその船乘場までお送りしませう」

と弟子は云つた。その言葉の中にも夫人をどんなに尊敬して居るかと云ふ事が見えてゆかしい。ロダン夫人は無雜作に一方口の入口から入つて來られた。背の低い婦人である。白茶に白いレイスをあしらつた上被風の濶い物を着て居られる。自分の手を最初に執つて、

「よくいらつしつた」

と云はれた。松岡氏が自分に代つて面會を許された喜びを述べた。夫人の頭髪は白金の様に白い。兩鬢と髭を大きく縮らせたまま別別に放して置いて、眞中の毛を高く卷いてある。自分がロダン先生の會て製作された夫人の肖像に寸分違ひのない方だと思つたのは、一つは髪の結様が其儘の形だつたからかも知れない。夫人の斯うして居られるのは自身の姿が不朽の藝術品として良人に作られた其喜びを何時迄も現はして居られる様にも思はれるのであつた。そんな感じのするせいか、これ程の老夫人が母らしい人とは思はれないで、生生として人妻らしい婦人であると自分には思はれるのであつた。

「未だ良人の許しを得ませんから今日は何のおもてなしを致す事も出來ませんが、この次は御招待をして寛りとして頂きます」などと夫人は懷しい調子で云はれるのであつた。

「一寸お待ちなさい」

と云つて、夫人は母屋の方へ行かれた。暫くすると露の滴る紅薔薇の花を澤山持つて來られた。

「二三日雨が多かつたものですから、わたしの庭の一番好い花を切つたのですけれど、この通なんですよ」

と云つて、夫人は花を自分に渡された。自分は心のときめくのを覺えた。夫人は自分達を船乘場まで馬車で送らせると云つてその用意を命ぜられるのであつた。其間に椅子へお座りなさいなどと自分の爲に色色と心を遣はれた。製作場の向側にはギリシヤ邊りの古い美術品かと思はれる彫刻を施した圓い石や角な石が轉がつて居るのであつた。馬車の用意が出來た頃弟子がもう一人歸つて來た。夫人は返す返す再會を約して手を握られた。自分達三人は馬車の上でど

んなに今日の幸福を祝ひ合つたか知れない。世界の偉人が此馬車に乗つて毎日停車場や船乗場へ行かれるのであると思ふ時、右の肱掛の薄茶色の切がほつれかかつたのも尊く思はれた。この歸りに更にロダン先生に逢つた事の嬉しさを今此旅先で　※（そうそう）と書いてしまふのは惜しい氣がする。暫く一人で喜んで居よう。

（六月廿日）

青空文庫情報

底本：「定本　與謝野晶子全集　第二十巻　評論感想集七」講談社
1981（昭和56）年4月10日第1刷発行
※疑問点の確認に当たっては、「巴里より」金尾文淵堂、1914（大正3）年5月3日発行を参照しました。
入力：Nana ohbe
校正：今井忠夫
2003年12月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

巴里の旅窓より

與謝野晶子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/